

家の海から

白浜で生息するオニヤンマ

53

京都大学助教 久保田 信 (京都大学 瀬戸臨海実験所)

サツマゴキブリ 紀南で増殖中

南方系のサツマゴキブリが紀南地方で生息域を拡大しているという紀伊民報の記事(6日付)や漂着の連載51回を見てさまざまな情報が寄せられた。特に今年、13年前に白浜町阪田の江津良海岸近くの高台に自宅を建てられたという女性からは、その当時から庭に生息域を拡大しているという目撃しており、子どもが『ケンゴロウ』と呼んでいたという。特に今年、繁殖は著しいものがあった。幼虫まで多数が一緒に暮らしているとのことだった。

また、記事で紹介されたが白浜町青年研修センターでも数年前から頻繁に見かけるようになったとのこと。夜中に調べてみると、プランターの下で寒さに耐えてかまっていた。不思議なこと、人家に住み着くクロ

歌山医療センターのバス停付近の植え込みで見つけたと写真付きで連絡を頂いた。サツマゴキブリのよう見た昆虫には、大きなオニヤンマの仲間が1個だけ、8月28日に満潮線に横たわっていた。赤トンボ類は時々漂着するが、この類は初めてだった。南方系の珍しい種ではないのかと思いついた。温暖化が増殖に拍車をかけているに違いない。冬季も凍死しないで越冬できる

の道路と海岸で数度目撃された。大きくなって黒い独特な特徴から、久保田先生らが、南紀生物誌で紹介されていたサツマゴキブリに違いないと判断して取りました。このほか、すぎみ町江住から田辺市学園の南紀高校に通っている尾崎悠哉さん(17)が今年6月15日、同市新庄町の南和



白浜町江津良で増殖するサツマゴキブリ

ニヤンマだぞと教示下さった。オニヤンマは体長10センチメートルあり、日本のトンボ類では最大種である。日本全国に生息するが、南西諸島には南方系の4種の近縁種(カラスヤンマ、ミナミヤンマ、オキナワヤンマ)が分布する。生きていた時は、いずれも澄みきった緑の大きな目をもち、小さな虫を捕まえて食べている。この緑の複眼は、1方個の小さな目が集まったもので、上半分は遠くを、下半分は近くをみるという遠近両用のすべれものだ。オニヤンマは、産卵も独特のやり方をする。雌が単独で、流れの緩やかな浅瀬に体を垂直に立て、長い産卵管を砂泥中に突き刺して産む。長い場合、10分もかけて飛び上がった後、降りたりの上下運動を繰り返す。このほか、河川の中流に生息するオニヤンマのヤゴ(乾風登先生同定)をはじめ、アゲハチョウやクマゼミ、背中が黒いアトモニアオゴキブリ(海南市にある県立自然博物館の場嶋氏同定)などが流れてきた。

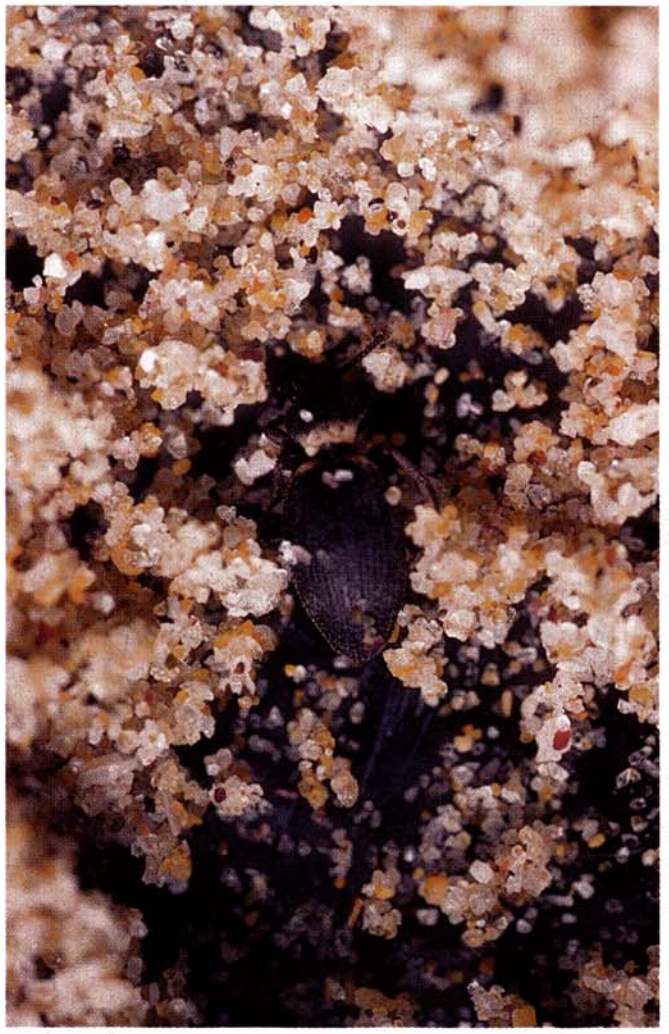
流着昆虫と海浜性昆虫

△ 北浜では、ハサミムシやワムバアカベネハネカクシなども見かけるが、それらより動きがのろいのがニセハマヒョウタンゴキブリだ。この甲虫は人の気配を感じると砂に潜って逃げまわると言われる。だが、潜っても深くは潜行しないので、居場所がすぐ分り、容易に採集できる。北浜では、2000年に初めてこの甲虫の存在が確認された。以来、毎年、きまつきで見かける。このような観察は、南紀生物同好会の「ろくお誌」22号(03年)にの場嶋氏と一緒に報告した。

海浜の満潮線付近には打ち上げ物がよくたまっている。そのような所で頻繁に見かけるのが甲虫の「トシムシ」類である。筆者が調査している漂着物と密接な関係にある。海産動物の乾燥した死がいなどを食べており、いわば「海岸の掃除屋」である。

トシムシ科は甲虫類の中では形態が最も変化に富んでいる分類群であるが、色彩は地味で黒色や黒褐色の単一色のものが大半である。ちなみに、「この科は黒い虫」という意味。和名は「トシムシ」とよく似たものが多いことによる。海岸の砂浜で生活する「トシムシ」には、他に、ホネコシムシやホンハゴキブリなど知られている。

連続33回で紹介したウミアメンボのように海中に生息しているもの、海辺に進出した虫として、海浜には、ハンミョウ類、オサムシ類、ゾウムシ類、シテムシ類などに海浜性の種がいくつ知られている。



北浜に生息する「ニセハマヒョウタンゴキブリ」



番所崎に漂着したオニヤンマ